

祖母の姫路空襲体験のこと

山本慎子（祖母から聞いた話 当時、祖母は姫路市在住 19歳頃の話）

私が子どもの頃、祖母が家に来て面倒を見てくれていました。寝る前には、色んな話をしてくれましたが、何度もせがんで聞いたのが戦争の話でした。祖父は、私が0才の時に他界したので直接話は聞いていませんが、祖母に海軍時代の話も色々と教えてもらいました。

その祖母も数年前に他界し、後に母から、祖母は戦争の話は聞いても嫌がってしてくれなかったという事を聞き、遠い過去の事ですが、申し訳ないことをしたな…と思いました。しかし、身近な人から戦争体験の話を書くことが出来た事については、今は亡き祖母に感謝をしています。

数年前に、祖母が住んでいた家を取り壊す際に、写真が出てきました。ゆっくり見てみたいと思いつつも日々追われ、忘れかけていました。こういう機会があったことで、写真を見ながら想いを馳せることが出来た事、有り難く思います。

「祖母のこと」

祖母の自宅は、姫路駅から一駅の京口駅近く、神屋町にありました。

姫路市内の女学校（現在の姫路東高校）に通っており、在学中に徐々に戦争の色が濃くなってきたようです。運動場で薙刀の練習をしたり、軍の奉仕作業もしたそうです。

家族は、両親と7人兄妹。祖母は長女でした。一番下の子は、おんぶ紐が欠かせない赤ちゃんでした。食生活も乏しかったようです。街中なので、畑があるわけでもなく、食べるものが少なくなるとサツマイモのツルをもらってきたり、わずかな米に雑穀を混ぜて、ほぼ粒が見えないような雑炊を食べていたそうです。ちょうど食べ盛りだった祖母は、兄妹の分まで食べて叱られたこともあったと聞きました。

父親が戦地に出向いていた為、家の手伝いもよくしていたそうです。朝は洗濯、オムツ洗い、学校が終わると夕飯の支度に風呂沸かし、お裁縫。勉強は、兄妹が皆寝てからしていたそうです。

私の記憶に擦りこまれているのは、恐らく二度目の姫路空襲の話だったと思います。

川西航空機の工場が自宅近くにあり、そこが狙われて爆撃を受けました。空襲があったのは夜遅くでした。その日、母親は遠方に泊りがけの用事で不在。中間兄妹4人は疎開に出ていたため、家には長女である祖母と、末っ子とその上の子、三人だったようです。その夜、いつものように家事などで疲れていた祖母は、空襲警報が鳴ったのも気付かず熟睡していたそうです。近所の人から窓ガラ

スを叩いて知らせてくれたものの、全く気付かず、爆撃音で目が覚めたそうです。「しまった！」と体を起こすと、窓に真っ赤な炎の影が…慌てて末っ子を背負い、もう一人の手を引いて外に飛び出しました。焼夷弾が降ってくる中、何とか防空壕へ向かおうとしたそうです。途中、飛行機が低空飛行で近づいて来るのが見え、とっさに道端の側溝に身を伏せます。『バリバリバリ！』という銃弾の音。機銃掃射のようでした。溝には他にも身を隠すように丸まった人たち。飛行機が通り過ぎたので顔を上げると、前後の人は銃弾で撃たれ、動かなくなっていたそうです。祖母は、下の子の手を引き、再び防空壕へと急ぎました。辿り着くことは出来たものの、溢れんばかりの人で入口近くにしか身を置くことが出来なかったようです。そして、またも爆撃。弾の欠片か爆弾が、自分の方に飛んで来たようです。耳の横をかすめ、壁に当たったようですが、おんぶしていた末っ子の頭がそっちに垂れていたら…と思うと背筋が寒くなったそうです。

その後、空が明るくなるまで防空壕に居て、朝方自宅へ帰ったそうです。自宅の場所まで戻ると、家の全焼は免れたものの、自宅前の道路は爆弾が落ちたようで、数メートルの穴が開いて大きく陥没していたそうです。家の窓ガラスも爆風で全部吹き飛び、無残だったといえます。その日、母親が慌てて帰宅。無事を確認し、ホッとした様子だったといえます。

しばらく道路の陥没もそのままでしたが、子供は無邪気なもので穴に入って遊んでいたそうです。戦地から帰還した父親は、変わり果てた我が家の様子に腰を抜かしたそうです。

戦争が終結を迎えると、アメリカ軍のトラックが大きな道路を行き来するようになりました。アメリカ兵が荷台に腰掛けて生の玉ねぎをかじる様子を、祖母はうらやましそうにじっと見ていたそうです。そうしていたら、トラックから数枚の板チョコが飛んできたそうです。毒でも入っているのかと思案していたら、アメリカ兵自身が板チョコを頬張って、美味しいというようなジェスチャーをしたので、拾って近所の皆で分けたという話も聞きました。

多感な時期を戦争という時代の中で過ごし、死ぬか生きるかの狭間を生き抜いてきたようです。